

1. テキスト

「表現作用」「六」。第5～6段落。163頁14行目～167頁4行目まで。

2. テキスト解釈

(第5段落)

前段落で「作用の実在性」と「意味の実在性」が問題となり、合目的作用においては「作用の実在性によって意味の実在性が維持せられる」(163, 1-2)のに対し、表現作用においては逆に意味の実在性(「理想的なるもの」)が作用の実在性(「実在なるもの」)を手段にするとされていた(「実在」に二義あり。「意味の実在性」「作用の実在性」における「実在」は真に有するという意味であり、「作用の実在性」が「実在なるもの」と言われる時の「実在」とは目に見え耳に聞こえるものという意味)。この段落からは実在的なものと理想的なものとのいずれが「場所」となるかによって表現作用とそれ以外の作用が区別されていくことになる。

この段落において初めて「場所」が術語として登場する。問題はこの語がどのような脈絡でどのような意味で用いられているか、それが今後どのような内実を得ていくかを見届けることである。

この段落冒頭で形と質料と作用者が区別されつつ、「作る者は形に従って作るのである、此故に形は働くものとも考えられる」とあり、実質的に形と質料の二者のみが問題となる。そうした仕方で「斯く質料と形と作用者が考えられると共に、物が変わると云うには、場所と云うべきものが考えられねばならぬ」とされる。これが術語としての「場所」の初出である。この後この「場所」が質料であるか形相であるかが問題となっていく。質料とは所謂「実在」、すなわち目に見え耳に聞こえるものであり、形とは「意味」ないし「理想的なるもの」と同義である。

この段落前半では「物が変わる」ないし「物が働く」には「その物が『於てある場所』というものが考えられねばならぬ」と言われる。後半では「直線的なる時」について「動き行く現在の背後に、何處までも止まれる現在がなければならぬ」とされ、一方でこうした「直線的なる時」の動きは「一瞬間から次の一瞬間に移る生産的作用」とも呼ばれ、他方でこうした「作用が作用を見るには作用を離れた立場がなければならぬ」とされる。

この前半と後半はどのような関係にあるのだろうか。「物が変わる」「物が働く」場合から出発し、「直線的な時」ないし「動き行く現在」に「生産的作用」を重ね、そうしたものが成立するにはその背後にそれを含んで「何處までも止まる或物」「何處までも止まれる現在」がなければならぬとして、「作用が作用を見る」立場、「作用を離れた立場」を導き出しているように見える。

「生産的作用」は第6段落の「基体なき働き」すなわち「精神作用」に対応し、「作用を離れた立場」は同じく第6段落の「表現作用」の立場に対応すると考えられる。そうするとこの段落は「場所」が「物が変わる」「物が働く」場合から表現作用に至るまでどのように純化ないし深化して行くかを述べているとも読める。

(第6段落)

前段落で術語としての「場所」が極めて大まかにスケッチされた後、次のように述べられる。「私は或物が変わる、或物が働くと云うことと、或物が意味を表現する、意味の表現であると云うこととの区別を、働きとその場所との関係に於て考えることができないかと思う」。これが「場所」概念導入の文脈である。すなわち物の作用と表現作用を区別するために「場所」概念が導入されたのである。

次いで「基体なき働きというのは尚精神作用の如きものに過ぎない。真に作用を超越して実在を自己の表現となすものは、作用を自己の中に成立せしめて、而も自己自身に於て止まるものでなければならぬ。作用に動かされることなく、自己自身の中に自己の作用を

見るものでなければならぬ」と述べられる。これによって精神作用のさらに先に表現作用があることが分かる。そうして表現作用の「於てある場所」とは「自己自身の中」であり、しかも「自己自身に於て止まるもの」であることが分かる。「物が変ずる」「物が働く」という場合には作用以外の質料(実在的なもの)がその「於てある場所」ということになり、精神作用は単に「自己自身を質料として」いるにすぎず、「自己自身に於て止まれる」ものに到達してないということになるだろう。

実際にテキストで確認して見よう。まず「建築家が家を建てる」場合と「生物の合目的的作用」の場合は質料が形を変ずる。「意識活動」の場合は「形が自己自身を質料として形成していく」とも、「意識作用が自己自身を質料として変じ行く」ともされている。その際「形其者の変ずる場所」が問題となり、「精神的なるもの(意識作用と同義と考えられる：引用者)に於ては、働くものと働かれるものが一つであるのみならず、働く場所というものもそれと一つである」と言われることになる。すなわち意識作用が働く場所は意識作用それ自身ということである。その根拠として西田は「自覚」の事実を挙げる。すなわち「精神的なるものは、すべて自己の中に自己を形成して行くと考えることができる、自己の中に自己を写すという自覚に於ては最も明に此の如き本質を見ることができであろう」と述べる。しかも重要なことは「精神的なるものにい於て始と終とが結合して居る」(163, 13)とあるように、「自覚」の「場所」が「止まるもの」だということである。

ここで術語としての「場所」が「自覚」に結びつくことになる。精神的なるものの働く場所は同時に自己の中に自己を写す自覚の場所だということになる。「働くものと働かれるものが一つであるのみならず、働く場所というものもそれと一つである」という表現に極めて似た表現が「内部知覚について」にあった。すなわち「知る我と、知られる我と、我が我を知る場所とが一つであることが自覚である」(127, 13-14)がそれである。しかしそこではまだ「場所」が術語として意識されているとは言えない。しかしながら「自覚の意識の成立するには「自分に於て」ということが附加せられねばならぬ」(同 12-13)と場所への注目があつた。「表現作用」において場所は「於てある場所」(164, 7)として注目されると共に、「場所」が術語として意識されており、目下のテキストにおいてこうした術語としての「場所」と「自覚」が結びついたことになる。ただし両者が結びつくのは「精神的なるもの」においてである。そうして「精神的なるものは永遠にして動くことなきもの」(166, 2)であり、自覚の場所も作用において「止まるもの」である。

しかしこうした「自覚」の事実、すなわち「働くもの」(意識作用：主)と「働かれるもの」(意識現象：客)と「働く場所」が一つというのは簡単には成立しない。ここには「確信」から「明白」への飛躍、あるいは反省から直観への超越が不可欠である。

例えばあることに夢中であつた時には主客が合一しているが、そのこと自体は反省しなければ分からない。こうした主客の合一は意識現象と意識作用が一つであると言っても、それが現在の「意識に於て」そうなのではない。こういう在り方を西田は「確信(確實 Gewissheit)」と呼んでいた(64, 12-65, 11. 77, 4-9, 12)。これはどこまでも過去ないし記憶における出来事であつて、決して「現在」に届かない。「確信」は反省の事柄である。しかしこうした反省の挫折を通じて「自己自身を失う」所に「明白」が成立する(65, 12-14)。実際テキストでも反省と意志、さらに両者を超越した直観ないし表現へと議論が進んでいく(これは『善の研究』における第2編、第3編から第4編への道行きに対応すると考えることもできる)。以下に確認する。

「精神的なるものは永遠にして動くことなきものと云い得る」と「精神作用(意識作用)」における「形の動き行く場所」が「自覚」の場所として「止まるもの」であることを確認した後、テキストでは「併し」と来て、「意識作用について知的と意的との区別をなすことができる。知的作用に於ては、一般的なるものが自己の中に自己を実現して行くと考えることができるが、意志に於ては、我々は自己の意識の圏内を破って、更にその背後のものに結合し行くと考えることができる。プロチンの云う如く、精神は一者を直観すべく努力するのである、一者に向つて動き行くと考えることができる」と、またしても精神作用(働き)について述べられる。

次いで「我々の意識の対象界を自己が自己を映す反省の場所と考えるならば」と来る。この「映す」は「反省」である。意識が意識現象を反省するということであり、意識一般

が経験を統一し、知識を構成していくということである。それは「一般的なるものが自己の中に自己を実現して行く」ことであり、このプロセスにこれで終わりということはない。理念はこうした「意識の圏内」を破ったその「背後」にあり、「意志」はこの背後の理念に「結合し行く」と考えられるのである。「我々の意識の対象界」がすでに目で見え、耳で聞こえるという意味での所謂「実在界」を意識現象ないし経験という仕方、自らの内に包んだものである。しかしそれはなお「反省の場所」にすぎず、「意志の内容」すなわち理念は「此場所に盛り切れない内容」であり、さらに「我々の意識を外から包むもの」でなければならないことになる。

こうした理念ないしアイデアから成る「意志の内容」が「精神的なるもの」すなわち意識作用の「根柢となる質料、所謂叡智的質料」だとされる。精神が「一者を直観すべく努力」し、「一者に向って動き行く」際に、「此の如き質料を基体として精神的なるものが動き行く」と考えることができるのである。

「所謂叡智的質料」とあるのはプロティノスを念頭に置いている。プロティノスはプラトンに倣って世界を知性的世界と感性的世界に分け、前者をさらに3つに区分し「一者(善なるもの)」「ヌース(知性)」「プシューケー(魂)」とし、「一者」からの「流出」によってすべてを体系的に説明しようとした。彼は「知性」にも「素材(質料)」を認める。形相を受取る前が「知的素材(叡智的質料)」の状態であり、かかる「知的素材」が形相を受取ることによって二つ(知性と形相)となる。さらに両者が合体して一となるが、かかる知性は二にして一、一にして二であって、その点において知性は「一者」とは異なるとされる(『エネアデス』Ⅲ8, 10)。

次いでテキストは「プロチンは質料の考を徹底して、物体も質料ではない、物の形や大きさや、種々の感性的性質すら形に属する、真の質料とは形を受取る場所とか、之を映す鏡とかいう如きものでなければならぬと云った」と続く。プロティノスは「素材(質料)」がいかなるものでなければならぬかを考察し、それはあらゆる形相を「逃れる」ものであり、決して形相を持つことはないという仕方、形相を持つものであるとする。そうしてその点でプラトンがそれを「受容者」「乳母」「場所(コーラ)」と呼んだのは適切であると考えられる。また形相と素材(質料)の関係の方式は「鏡」の場合と同様であるとしている(同Ⅲ6, 13)。

テキストでは続いて「此の如き非有が有となる時」とあるが、「非有」とは「真の質料」ないし「形を受取る場所」のことである。「非有」と呼ばれたのはアイデアの「有」に対してである。それが「有」になる時、「叡智的実在が成り立つ」とされる。理念ないしアイデアの実現であり、知性と形相の合体の成就である。

テキストでは「更にかかる叡智的なるものを成立せしめるものが一者でなければならぬ」と続く。「叡智的なるもの」とは個々のアイデアであるが、個々のアイデアを背成り立たしめているのは、プラトンに於て〈善のアイデア〉が〈アイデアのアイデア〉であったように、〈善なるもの〉即ち「一者」だということであろう。すなわち「有るのは、それが善いから」ということである。人生において我々は個々の理念を追い求める。それしかできない。しかしそのこと自体が問題になる。こうして我々は人生の全体を問題とするようになる。これが「善そのもの」を求めるということである。プロティノスで言えば「一者を直観すべく努力する」ことになる。しかしプロティノスにおいてもこうした「努力」によって「一者」に触れることができるというのではない。プロティノスはプラトンの『饗宴』における「忽然(エクサイプネース)」という語を用いている。そうして「高波によって放り投げられたような状態」で、合一が実現する、という(VI7, 36)。

続いて次のように言われる。「プロチンは叡智的なるものは一者に包まれて居ると云うが、一者は叡智的なるものの空間である」。この「空間」がここで成立している「場所」である。「場所」はここでは「一者」そのものである。

こうした「一者」の立場からすべてを見ればどうなるであろうか。次のように言われる。「物理的空間上の線がベクトルと考えられる如く、一者の上の線は純なる精神作用である。叡智的なるものが一者に於て動き行くと考えられる限り、それは意志である。意志者をも超越して之を中に成立せしむる一者の立場から見れば、すべてが意味に充ちた表現であるのである」。「すべて」とは機械的作用、合目的的作用、意識作用(反省および意志)

のすべてを言うのであろう。続けて「純なる質料が光を映す鏡とするならば、一者は光其者を見る眼ともいうべきであろう。動き行くものを、場所其者の立場から見た時、働くものは表現となるのである」と言われる。「一者は光其者を見る眼」とは一者において、見るものと見られるものと見る場所が一つであることを言っている。ここでは質料的・基体的な鏡は割られている。「場所其者の立場」も「一者」の立場と同義である。そこにおいて「見た」時、「働くもの」は如何なる作用であれ、一者そのものの「表現」なのである。